

# 甲府にみられる墓碑・墓石の変遷

小 沢 秀 之

## はじめに

遺体を葬る際、古くは枕石でいどのものが埋葬地に置かれるならわしがあつた。これはあながち標識<sup>(1)</sup>というものではなく、忘れ去るものであつた。柳田国男の「葬送習俗語彙」では標識のある祭祀地をムシヨ、サンマイと呼んでいるのが古語であるという。ハカはものを過去にする数え方の言葉で、ハカが墓石を意味するものに解せられたのは平安中期の天台宗の高僧慈恵大師が天禄三年<sup>(2)</sup>(九七二)に記した遺言に、石卒塔婆を立て、弟子達が来礼する標示にせよと書かれたのが墓碑のはじまりという。甲府市内に所在する中世の墓碑は支配階級か有力者らの限られた階層の人々のもので、多くの部下や親族らが死者の霊を供養するための墓碑が多かつた。一般の人々が遺骸を葬った埋め墓は忘れ去る考え方から標識はなく、近世になつてから寺の説教や次に幕府の寺檀制度で遺骸尊重の気風が濃厚になつて、時代が下るにしたがつて埋葬地に墓石を造立することが常識になつた。そして墓石に財のあるものは豪華なものを造り、貧しきものは三年忌、七年忌をのばして一三年忌、一七年忌に造立するような気風もあつた。

## 無 縫 塔

湯村の塩沢寺の厄除け地藏堂の隣接地に無縫塔が三基並んである。中世の石彫塔碑には供養塔が多いが、この無縫塔は墓塔として建てられたものであろう。京都の泉涌寺開山不可棄和尚が安貞元年(一二二七)宋に渡り示寂、間もなく泉涌寺開山堂の中に宋人の石工の作と伝える開山塔が造立されたのが日本の無縫塔のはじめという。また一説として唐の南陽の忠国師<sup>(3)</sup>が自身の没後に何を望むかと天子の代宗から問われた際に「老僧がために箇の無縫塔を作つてほしい」と答えたという。禅宗で重んじられている「碧巖録」の記文に載るもので、無縫塔という名称はこの時から現われており、元来が卵形であるので縫目がない意味である。僧侶の墓塔形式としてふさわしいので創案の禅宗はもちろん、禅宗以外の寺でも僧侶の墓石にはこれを用いるようになった。

無縫塔には単制と重制の二種形があり、塩沢寺の無縫塔は三基が並んでいるが、いずれも重制で、右端のものが県指定文化財である(写真1)。構造はいちばん下に基礎の石台、その上に平面六角形の竿を建て、次に四段葺蓮花弁をもつ中台を載せ、最高部に高さ五

二cmの卵形の塔身が据えられている。塔身の上から下までの曲線が力強く、古調を帯びている。竿の一面に応安(北朝)七年(一三七四)の銘があったが、今は微かである。なお三基のうち中央の無縫塔は塩沢寺中興の権大僧都法印全法和尚の墓塔で、正保五年(一六四八)、左端の塔も元禄年代の墓塔である。

善光寺の無縫塔 善光寺町善光寺の墓地に永禄一〇年(一五六七)没した開山光普鏡空大和尚以下ずらり二〇数基歴代和尚の無縫塔が並んでいるが、いずれも重制の塔で、この時代には総高一・五四mに及ぶ、長大なものに変化した。

一蓮寺の無縫塔 太田町一蓮寺にも歴代住職の無縫塔が同様ずらり並んで一画を成している(写真2)。いずれも単制の造立である。単制は下部の基礎、その上に蓮弁の請花うけはな、そしてすぐ塔身となる単純な積重ねであるが、塔身の卵形をことさら太く、高くつくる傾向が江戸期に濃厚になった。一蓮寺のずらり並んだ中で一基を測ってみると宝永二年(一七〇五)造立のものが高さ一・三九m、塔身の円周二・〇〇mの大きさである。この江戸期には民間でも無縫塔造立の風も見え、卵形の一面を平らにし、戒名を入れたものもある。

### 宝篋印塔ほうきょういんとう

湯村・塩沢寺に無縫塔と並んで宝篋印塔一基がある(写真3)。構造は基礎・塔身・笠・相輪の積重ねであるが、相輪を除けば全部方形の四角である。宝篋印塔は中国の密教の「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」の教えから来た名称で、「この塔に一香一華を供え礼拝供養すれば災害から免れ、死後は必ず極楽に生れる…」

といった功德が説かれている。

鎌倉初期から日本各地に造建されて来たが、塩沢寺の宝篋印塔は南北朝時代に造立された安山岩製で、基礎の部分が二区に分けられ、四面に二個ずつ格狭間こくせきまを彫り出している。塔身の高さはあまり高くなく、四方に浅い葉研彫りながら雄渾な書体の梵字(東・西・南・北)を配列し、笠は階段状に四段、下部に二段をつけ、笠屋根の隅飾り突起は四孤のうち二孤は欠落、一孤も半ば削げ落ち、完全なのは僅か一孤のみとなっている。笠の上に立つ相輪は露盤・請花うけはなの上に九輪が刻まれているが、その上の請花・宝珠が欠落しており、塩沢寺宝篋印塔はこのような崩壊ぶりに文化財生命を低めた。一孤残った隅飾り突起を測つて見ると、突起先端が僅か一・一cm外にひろがっており、外見上ではほとんど直立姿勢に切った鎌倉中期の特徴を感じしめている。

武田関係の宝篋印塔 古府中町大泉寺に武田信虎の五輪塔がコンクリートの囲いの中に安置されている。その東と西に宝篋印塔があるが、これは信虎墓とは別の供養塔である。岩窪町円光院には信玄の妻三条夫人の墓塔宝篋印塔があり(写真4)、また和田町法泉寺には武田信武が開創した寺として信武の宝篋印塔(写真5)と勝頼の宝篋印塔があるが、信武・勝頼らは戦乱の中で没しているのので、後に霊をまつた供養塔である。

三条夫人は元亀元年(一五七〇)甲府・躰躰ヶ崎館で没し、生前に菩提寺として石和の古寺を躰躰ヶ崎館の東に移し、円光院と寺名を改めた由緒もあるので、三条夫人の遺骸は没後すぐここに運ばれ、埋葬したので、明らかに墓塔である。一方、大泉寺は信玄が父信虎の菩提寺に創立したが、信玄の方が先に天正元年(一五七三)

こまんば

信濃・伊那の駒場の陣營で没し、その子勝頼は天正一〇年（一五八二）天目山へ向う途中の田野で討死、武田家は滅びた。和町町法泉寺に勝頼の宝篋印塔が祀られてある。勝頼の首級は織田軍によって京都で晒された。その残虐さに妙心寺住持南化和尚は織田信長に首級をもらい受けて一時、妙心寺に葬った。そして末寺である法泉寺の快岳禪師と謀って、甲斐へ齒髪を持って帰り埋葬したのが勝頼供養の宝篋印塔である。また武田信武は武田家九世の当主、甲斐の国守の時、元徳二年（一三三〇）月舟周勲禪師に帰依し、同師の初祖である夢窓国師を開山と仰いで法泉寺を創立した。のちに足利尊氏の殊遇を受け、安芸、若狭等を管領し、信濃、尾張にも領地を持つ戦国大名となったが、尊氏没後は勢力は落ち、晩年は剃髪し、北朝の延文四年（一三五九）に没したので、法泉寺に葬ったと記録されている。別に五輪塔があり、宝篋印塔は後に供養の時に造建されたものである。信武・勝頼の塔には相輪が無く、かわりに五輪塔の空・風輪を載せているが、石彫美を見苦しくしており、むしろ空・風輪を除いた方がよいのではなからうか。

#### 諏訪頼重夫妻の墓

東光寺町東光寺に風化と崩壊の姿がはげしい諏訪頼重の墓がある。信濃の諏訪領主であった頼重は天文一一年（一五四二）七月武田氏に滅ぼされ、甲府の板垣信方の邸に幽閉されていたが、同七月二〇日自刃した。頼々夫人は信玄の妹で、同一年一月一九日没した。この夫婦の宝篋印塔は東光寺の一画にある。頼重塔は高さ六三cm、相輪は半分欠落、笠の隅飾り突起も欠け、ただ基礎の格狭間だけは明瞭の形で残り、上部の宝珠先端形起伏線が五つ、室町期の装飾である。一方、頼々夫人塔は高さはやや低く、格狭間の形は平たくなり、上部の宝珠先端形起伏線が逆に窪み

から始まる特異な形となっている。

これら武田関係宝篋印塔はそれぞれ時代差の特徴が隅飾り突起に現われており、その先端部が時代を下るにしたがって別記の表のように開いている。

次に宝篋印塔の第二の特徴である基礎に彫られた格狭間<sup>こうざま</sup>については、塩沢寺の塔は格狭間の湾曲したふっくらした線が柔らかく表現され、上部の宝珠先端形にある突起とその下る起伏線が合わせて三つ（鎌倉風格）、また円光院の塔と大泉寺の西の塔の格狭間は上部の起伏線が七つとなり、さらにその縁取り線の中へ盲連子<sup>めくらんじ</sup>を描き飾っており、その連子数は大泉寺塔の方が少なく、飾り方に時代差が見える。

#### 五輪塔

塩沢寺の塔	19度
円光院の塔	22度
頼々夫人の塔	22度
大泉寺西の塔	23度
法泉寺信武塔	28度
大泉寺東の塔	28度
法泉寺勝頼塔	29度

五輪塔は仏教の五大思想である地・水・火・風・空の宇宙観を表すものを石造で示したものである。この五輪塔の形に現わしたのは中国の線図、印度の卒塔婆などをもって起源説が出ているが、日本でも舍利<sup>しゃり</sup>（骨片）を入れる宝塔形に、基礎と宝珠を加えたもの（川勝政太郎）、また大日如来の座った形から五輪塔が生れたという説

(藪田嘉一郎) などがある。

鎌倉期では五輪の各輪に「キヤ・カ・ラ・バ・ア」の梵字が刻まれ、江戸時代になるとこれが上から「空・風・火・水・地」と日本文字となり、このほか「南無阿弥陀仏」や「妙法蓮華経」の文字を各輪に入れるようになったことは、五輪が大日如来を本尊として供養塔として発展してきたことを物語っているものである。

**武田義信の墓塔** 武田義信は信玄の長子（母は三条夫人）であるが、妻に駿河の今川義元の娘をめとった関係からの中に武田・今川両家の戦国期の勢力・領土争奪の拮抗の間に、義信の謀反説もあって、永禄八年信玄は義信を幽閉した。そして同一〇年（一五六七）死去したので、遺骸は東光寺に葬った。東光寺墓地にその五輪塔が諏訪頼重の墓のそばに造建されてある。五輪の各輪に「キヤ・カ・ラ・バ・ア」の梵字が刻まれており、総高八七cm、火輪中央部の軒先厚み五cmに対し、左右の軒の厚みはのびて一〇cmとなり、緩い反りとなっている。水輪はやや平たく、地輪は縦長で、室町期の作と見られる。

**大泉寺の信虎の塔** 甲府市内に存在する五輪塔の大きい方の部類に属するが、上部の空風輪が欠落し、かわりに宝篋印塔の相輪を載せており、山梨県史跡指定標識板にも数年前の修理の時に相輪をすえていたことが揭示されている。文化財価値を低下した姿である。地輪から火輪までの高さは八三cmで、空・風輪を載せた高さを推定すると一m以上になっていたものであろう。地輪は長方形の縦長で四方各面は無地型、水輪は高さ二六cm、直径（推計）三六cm、豊かな円の張りが見え、火輪の軒先中心部の厚み六cmに対し両端軒先は七・五cmの僅かな反りとなっており、鎌倉末期の風格がみえる。信

虎は信玄の天文一〇年（一五四一）の自立によって、駿河の今川義元を頼って退隠、その後諸国を放浪して暮らし、天正二年（一五七四）三月五日信玄死後の翌年に信濃の高遠で病没した。大泉寺は生前に信玄が菩提寺として創立していたので、ここに葬られた。

**逍遙院の五輪塔** 桜井町に信玄の弟信廉（逍遙軒）が開基した曹洞宗の逍遙院がある。同寺境内墓地の西寄りに同町久保寺春雄氏方の墓があり、同家代々の墓石の並んだ中央に総高一・五二m、上から空・風・火・水・地の文字が表面に刻まれ、地輪には左右両側に銘文が刻まれた五輪塔（写真6）があるが、材石が凝灰岩のため風化による磨滅度がひどく、読み難い中から次のような文字が解読された。

□□□□□□□□□□

五輪一基□□□□者也

千時寛永九壬申二月一日 施主□

在銘によって江戸初期の五輪塔と確認された。久保寺家の祖先は同地の桜井を所領し、その地名をとって桜井刑部少輔という人物であったが、武田信虎の甲斐国統一の攻略段階で滅ぼされ、信濃の村上義清を頼って落ちのびたが、後に村上義清も信玄時代の攻勢で越後に追われた。この時久保寺家祖先は討死したのか判然とせず、子孫が信玄の家臣になって再び桜井村に落着いたという伝承がある。元は桜井村の奥地にあつた墓碑・墓石群を逍遙院に移したのが現在の大五輪塔のほか十数基である。五輪塔の特徴は火輪の軒先に僅かの反りによって豪快な作風を見せ、水輪はやや平たい感じであるが、水・火輪との均衡を保つ美しさをもっている。

なお久保寺家墓地には石祠の中に二体の一石五輪塔が納められた

珍しい夫婦像と思われるものがある。

**加藤光泰の五輪塔** 善光寺町の善光寺に県史跡仮指定となっている加藤光泰の五輪塔がある。安山岩の建造で黒々と艶を持ち、逍遙院の久保寺家五輪塔と同様、空・風・火・水地の文字を一輪ずつに刻み、総高一・四一mで、久保寺家塔よりやや低く、火輪の高さは加藤五輪が八cm高く、軒の長さも長く、また中央部軒先の厚みは加藤五輪は薄く、これによって両端の軒の反りは強くハネ上り、水輪は円周が三〇cmほど加藤五輪の方が久保寺五輪よりのびており、それだけ平たい形となっている。このように江戸中期に入って変り方を示した。加藤塔の地輪は各四面に縁取りを行い中をほりくぼめ、そこに加藤光泰の経歴がほりめぐらせて書かれてある。甲斐国領主であった加藤光泰は豊臣秀吉の命で朝鮮征伐に出陣、文禄二年（一五九三）八月二九日釜山浦で病没、群臣らが柩を持ち帰り善光寺に葬ったが、五輪塔は子孫によって元文四年（一七三九）二月二九日造建されたものである。

この文禄の朝鮮役で、加藤光泰のあと甲斐の領主となった浅野長政、幸長父子は、幸長が慶長二年（一五九七）再度の朝鮮役に出陣した。この時親族や家臣ら多数が戦死した。同三年に大泉寺でこの戦没者らの法要を行い二基の慰霊五輪塔を造建した。この二基はすでに江戸期の平たい水輪に、薄い火輪の軒反りがハネ上った五輪塔になっている。

**信立寺開基の五輪塔** 台石まで総高一・五五mで、上から妙・法・蓮・華・経の日蓮宗題目が一字ずつ刻まれてある。開基の日伝上人は天文一七年（一五四八）二月一日に遷化しており、この五輪塔は追善供養として二四世の日清上人が寛保三年（一七四三）夏

造建したものである。またこの五輪塔のかたわらに信立寺創立の大旦那として武田信虎の五輪塔が造建されている。やはり妙法蓮華經の文字を五輪に刻み込み、日伝上人塔と同じく江戸期の造建である。この二基が並んだ塔形を代るがわる見比べると、火輪の軒反りの相違が著しく違い、造建年は同じ寛保三年でも石工は同一人でなく、異った人物がつくり上げたもので、作風にそれが現われている。

**小五輪塔群土中から出現** 昭和五十六年九月、甲府市伊勢三丁目九番地の側溝工事現場から五輪塔七〇基、宝篋印塔六基分が続々と出土した。ここは廃寺の般舟院墓地の跡地であった。般舟院は武田領国時代に一条小山（現甲府城跡）にあった時宗道場一蓮寺三六院の一つであったが、甲府城の築城の時現在の伊勢地区に移転してきた。明治初期に廃寺になり、墓地の跡は荒川の度び重なる氾濫で埋没してしまっていたのが側溝工事によって掘り出されたものである。墓石の形は古く、おおむね南北朝から江戸初期にかかる形式のものである。全体として規模は小さいながら、かように大量に出土する例はなく、市教育委員会では昭和六一年三月、廃般舟院墓石群一式として市文化財に指定、太田町一蓮寺内庭に整理、保存中である。

**板卒塔婆** 五輪塔は江戸時代に入って板碑型一石五輪塔などに変遷していった傾向もあったが、その形態は板卒塔婆の形に残って現代も葬儀の時、回忌供養の時、施餓鬼会の時などに墓前へ捧げられている。

## 板 碑 系

石彫作品で市内最古の造立銘を持つ碑は塩沢寺地藏堂の東にある

大きな板碑である（写真7）。貞和六年（一三五〇）の在銘で、貞和は北朝年号。その年の正月に「観応」と改元されているが、改元の事を知らずに安山岩に刻み込んでいるのは南北朝争乱の時代相を現した歴史的碑である。高さ二・一五m、幅〇・九五m、上部が山形に尖り、その三角形の下に横二条の切込線を造ったのが板碑の特徴である。切込線下部は額部が設けられ身部との境をなしている。身部は長方形で、上方中央部に梵字で大きく弥陀種子（キリク）が刻まれ、その下部に造立趣旨、年紀、願主等が刻まれ、左側面には大工銘があったが今は「大工」とのみで欠失してしまっている。

この碑は昭和一二年の頃まで文化財保護の旧法である史跡名勝天然記念物法によって単に「古碑」として山梨県指定となっていたが植松又次氏（山梨郷土研究会理事長）が小学校教師の頃、碑の足部を掘り埋もれた文字を解説した結果、「当莊本土」の三年忌に当り、結集した講が造立団体となつて供養の板碑を立てたことが明らかとなつたという逸話があった。貞和六年の頃は湯村付近は志麻庄、福田庄、小松庄などが入り組んでいた所とて、どこの「当莊本土」か、それは誰かは判らぬにしても南北朝時代の歴史を伝え、また雄渾な薬研彫りで弥陀種子を刻し、新興仏教の弥陀信仰を現した鎌倉末期の遺構を伝える板碑である。

**板碑型一石五輪塔** 江戸時代に町年寄をつとめた日記「坂田文書」で知られる大和町坂田家の墓が中央三丁目瑞泉寺にある。坂田家初代と二代の墓碑二基は甲府戦災の時倒れて割れたのを補修し、今は石造箱型の中に立っている（写真8・9）。初代源右エ門は天正一一年（一五八三）に死亡、その夫人は元和六年（一六二〇）に死去したことが塔の両側に彫られてあるので遅くも七年忌あたりに造立したと推定すれば寛永四年（一六二七）である。もう一基坂田家

二代の与市左エ門塔は同様夫婦の碑で、この塔も寛永時代に入つての造立と推定される。板碑型一石五輪塔は背部は自然石の荒削りであるが、表は平面とし、上部山形の尖りと、その三角形の下に二本の切込線を彫り込んだところは板碑と変らない。そして長方形身部の上部に南無阿弥陀仏の念仏称号を記し、左右に死者夫婦戒名、死没年月日、下部中央を彫りくぼめ、その中に一石五輪を浮彫して板碑と五輪塔を巧妙に調和させている。坂田家初代塔は高さ一・三六m、二代塔は上部山形と切込線の板碑型特徴がなくなり、五輪形態は初代のものより写実的な変化を見せている。

瑞泉寺にはもう一基、内藤家墓地に一石五輪塔がある。高さ一・七二m、幅〇・五四m、石の厚み〇・二二mで、上部に山形の尖りの板碑型を、縁とり式に彫りくぼめたところは装飾的に変化している。中央に南無阿弥陀仏の称号、その下に五輪塔を浮彫りにしたところは坂田家塔と同じで、また火輪の軒先を逆三角にした点も、坂田家初代塔と似た形である。身部に彫られた死者の命日である寛永五年（一六二八）から推定すると、造立は坂田家塔よりやや下つた時代であろう。

**乙黒家墓地に一石五輪塔三基** 上飯田の延寿寺は日蓮宗であるので、旧家の乙黒家の一石五輪塔三基には妙法蓮華経の題目称号が五輪に刻まれている。右寄りに第一基（写真10）は延宝五年（一六七七）、次の第二基は天和三年（一六八三）、第三基は元禄一一年（一六九八）と葬った死者の命日が刻んであり、造立が七回忌頃とすればいずれも江戸中期の板碑型一石五輪塔の終りを告げた頃のものである。板碑型が僅かに残るのは頭部の山形の三角形のみで、二本の切込線は消え、このかわりに切込線を湾曲に変化させて縁取り線となし、やわらか味を出している。

## 祠形墓 碑

**磯部家の屋敷墓** 国玉町の磯部家は代々当主が玉諸神社の神主を続けて来た家柄である。国玉町飯寄（小字名）に磯部家の神官を継いできた男性ばかりの墓がある（写真11）。夫人や子女の墓は女墓といい、共同墓地の奥の画に一〇数基の墓碑が並んでいる。夫人の墓碑には□□氏と生家の姓が石祠に彫られている点は嫁いで来ても実家の姓を名乗るという武家の家風と同じであるが、男女別々に葬ることは磯部家の神に使える厳格さからきており、共同墓地も国玉町の東隣接地上阿原町分にあるが、国玉町全体は玉諸神社の神域であるとして隣町地域に古くから墓地を設定したのは不浄をきらったためである。

男墓の神主らは神葬祭によつて埋葬され、各□□の命みことという神名が贈られて石祠にまつられている。ここは神主屋敷のうちの元は畑になっていた所で、いわゆる別所（屋敷墓）の形態をたどってきた。「磯部家系譜」一卷によると、建武年中（一一三三—四一五）武田信武の弟、武田七郎信政の子、武田三郎が磯部藏人保成の娘と結婚し、養父の神官を継いだが、武田姓を名乗ったままの時代があり、磯部姓になったのは武田勝頼が滅亡後の二郎三郎正元の時代で、正元を磯部家初代としている。その正元は寛永七年（一六三〇）に没し、その石祠が屋敷墓東寄りにある。二代の正吉は貞享二年（一六八五）に没し、北寄りに埋葬せられた。三代正盛は宝永四年（一七〇七）に没し、最も南に石祠にまつられている。このように第一一代正佐まで石祠が一行三つずつ四通りに並ぶ形となり、第一一代は昭和四年に没しており、近代の時世でこのように屋敷墓が継続使用され存在するのは珍しい事実である。

**寺墓地の石祠型墓** 石祠型墓が現われるのは全国的に元禄時代と

いわれているが、甲府では磯部家の寛永七年の初見に次いで、湯村の松源寺墓地に寛文八年（一六六八）と元禄一三年（一七〇〇）の夫婦らしき石位牌を中に納めた大きな石祠がある（写真12）。七回忌に建造したとしても宝永四年（一七〇七）となるが、笠の屋根棟に下り藤家紋二つを彫り込み、両側の鬼瓦には鬼面を浮彫りし、軒に垂木を施し、台石にも石段をつくって登るようにした神社建造物の形式を功みに石造にした。

同じく寛文一三年（一六七三）に没した窪田家の大石祠が太田町一蓮寺にある。中に信士と大師の双体石像がまつられた総高一・三二mという大きさである。窪田家は甲府城築城前一条町に一蓮寺坊があった時寺代官を勤めた家柄と伝えられる。石祠は笠（屋根）と塔身、台（基礎）の三段階の構成で、主として笠に重点をおいて裝飾しており、元禄を中心として華やかな時代へ墓碑は入っていた。

## 江戸中期以降の多変化

板碑型の二条の切込線は早く無くなっていったが、その後の墓石の変化を見ていくと、山形の尖った三角形が残り、宝珠型の尖りの線をそれに合わせて二重彫り縁とりの大型墓石が城東二丁目教安寺の寺本家墓地に立っている（写真13）。高さ一・五〇m、延宝四年（一六七六）の在銘である。上部に梵字で弥陀三尊（弥陀・観音・勢至）が刻まれている。

また板碑の二条の切込線を直線ではなく、三角の山形の下へ半円にして曲線のやわらかさを出したものが多く現われた。また頂上の尖り型を四角の方柱状にもってきたものもある。柱状石碑は最も単純に表面に死者戒名と没年月を記す墓標で、庶民にとっては石碑代が安価であり、この種のもものは各寺院の墓地をにぎやかに林立させた。この中で円光院平岡家墓地に笠付柱状碑（一名笠付卒塔婆）を

つくり、墓の立派さを誇りにしたものがある（写真14）。笠には唐破風作りを前面に、また三方につけたりして豪華な神殿風につくり上げたものもある。

やがて頂上の尖りがすたれ、四角方柱状の頂上をおだやかに丸味をつけたものが反射現象のように現わしたものもある。特に甲府医学所頭取宇佐美通義の墓は四角立方体柱状型で（写真15）、石柱の表面は死者名であるが、周りの三面に死者の経歴や功績をこまかく綴った墓石である。こうした学者や医官、文人階級につくられたのも江戸末期の文化の興隆をよくあらわした歴史的なものである。

### 高遠石工の作品

岩窪町の武田信玄の遺骸を火葬にした所に高さ一・四五mの「法性院大僧上機山信玄之墓」と文字も深く彫られた方柱が四段の基壇の上に建てられている。武田信玄が天正元年信濃の駒場の陣中で没し、遺骸を留守役の土屋右衛門尉屋敷に運び、ここで火葬にしたものである。武田家が滅亡後、ここは野草の繁茂にまかせきりであったため、魔縁塚と呼ばれていたのを怪しみ、着任した代官中井清太夫が掘り返させたところ、信玄の火葬場所と判り、安永八年（一七七九）武田家旧臣ら五二名が高遠の石工らを招いて碑を立てたものである。高遠石工は優秀な技術を持ち、台石に北原与平治、北原源八、同源内の名が彫られている。

高遠は耕地が狭く、四囲の山に石材が多く産出するところから石彫技術が発展した土地である。近世では守屋貞治と太良兵衛の作品（石仏）が有名になっており、甲府で最初の技術を残した北原らは守屋の二〇年前の先人である。高遠の人々が甲府へ出稼にくる取次所のような役割をしていた北原平蔵が天保一〇年（一八三九）島上条村（敷島町）に住んでいた記録が高遠に残っている。

信玄の火葬場碑建造以降、高遠石工らが来甲し作った作品は明和五年（一七六八）の元紺屋町華光院の重制宝塔（写真16）、天明六年（一七八六）塩部三丁目の関屋地藏像、文化八年（一八一）上帯那の子安地藏像、文化八年（一八一）湯村の湯谷神社常夜灯、嘉永元年（一八四八）の桜井町逍遙院の重制宝塔がある。このうち目立った作品は華光院の高さ四mの宝塔、逍遙院の六mにおよぶ大宝塔であり、これは甲府の誇り得べき石彫美術品であろう。

### 近代の墓石型

戦災後著しく墓石・供養塔類は変容した。五輪型（復古調風や笠を薄くした新型）、舟型（仏像の光背型）、笠付型（上部の将棋駒型、柱状型、箱型（箱の蓋状）、丸彫型（像容の全体像を刻む）、自然石型等さまざまな変った。趣向・信仰いろいろである。

### 注

- (1) 柳田国男編「葬送習俗語彙」昭和二年民間伝承の会発行。「先祖の話」定本柳田国男集第二〇巻 昭和三十七年筑摩書房発行
- (2) 庚申懇話会共著「石仏研究ハンドブック」昭和六〇年雄山閣発行
- (3) 川勝政太郎著「新版 石造美術」昭和五六年誠文堂新光社発行
- (4) 山梨県教育委員会編「県指定 山梨県の文化財 改訂第三集」昭和五十七年発行
- (5) 庚申懇話会編「日本石仏事典 第二版」昭和六〇年雄山閣発行

（市史編さん専門委員）





(1) 塩沢寺の重制無縫塔

在銘 応安7年(1374)、総高130cm、  
塔身高52cm。湯村三丁目17-2



(2) 一蓮寺の代々住職等の単制無縫塔  
甲府市太田町



(3) 塩沢寺の宝篋印塔

銘はないが推定鎌倉期、高さ130cm、  
笠の長さ57cm、塔身各面27cm。湯村三  
丁目17-2



(4) 円光院の宝篋印塔

武田晴信室三条氏墓、元亀元年(1570)  
死没、死後造立、総高139cm。岩窪町  
500番地



(5) 法泉寺の武田信武の墓  
宝篋印塔に風空輪を載せたのは誤り。  
甲府市和田町



(6) 逍遙院の五輪塔  
在銘 寛永 9 年 (1632)、総高152cm。  
桜井町999



(7) 塩沢寺の弥陀種子板碑  
在銘 貞和 6 年 (1350)、高さ215cm、  
幅93cm、県指定文化財。  
湯村三丁目17-2



(8) 瑞泉寺の板碑型一石五輪塔  
坂田家墓、在銘 天正11年 (1583)、  
高さ136cm、幅47cm。中央三丁目 7



(9) 瑞泉寺の板碑型一石五輪塔  
坂田家墓、在銘 慶長 11 年 (1606)、  
高さ124cm、幅47cm。中央三丁目 7



(10) 板碑型一石五輪塔  
乙黒家墓、右より第一基在銘 延宝 5  
年 (1677)、高さ121cm、幅41cm、厚さ  
16cm。飯田五丁目延寿寺



(11) 国玉町磯部家の屋敷墓 (男性墓)  
甲府市国玉町飯寄



(12) 松源寺の江戸期の石祠墓碑  
高さ68cm、中に寛文 8 年 (1668)・元  
禄13年 (1700) の位牌を納める。湯村  
二丁目



(13) 板碑型墓石

寺本家墓、在銘 延宝4年(1676)、高さ150cm、幅55cm。城東二丁目教安寺



(15) 教安寺の四角立方体型墓碑

在銘 宝暦13年(1763)、高さ73cm、幅32cm。城東二丁目8



(14) 円光院の笠付墓石

平岡家夫婦墓。岩窪町500



(16) 華光院の重制宝塔

在銘 明和5年(1768)、高さ425cm。元紺屋町33